

女川—東京 つなぐ手紙

東京都町田市の玉川学園小学部4年生の教室前に、35枚の手紙が張られている。それぞれ写真が付いている。廃虚のような病院や家が根こそぎなくなった住宅地が写っている。

書いたのは東日本大震災で被害を受けた宮城県女川町の町立女川第一小学校に通う4年生たちだ。

同級生の女の子と男の子が、玉川学園が被災児童向けに用意した「短期留学」制度を使い、9月まで同校に通っていた。そこで女川の現状を東京の子どもたちにも知ってもらおうと、被災したまちの様子を自分たちで撮影し、メッセージを添えた。2人が夏休みに女川へ帰省した時に手紙を預け、2学期に玉川学園の4年松組に届けた。



4年松組に短期留学していた児童。後ろの手紙は女川第一小の2人(両端)が届けた。中央の児童は宮城県東松島市から短期留学していた=東京都町田市の玉川学園

町田の小学校に「短期留学」の2人、懸け橋に

風景を写した女の子は、こう記した。「近くから見ると桜の木に5、6枚の葉っぱが生えてきています。これからのくらしい時間がかかって前のころの女川町にもどり、桜の花がさくのかはわからないけれど、わたしたちは負けずにがんばっていきま

す」壊れた建物が点在する風景を撮った男の子は「女川町の人たちは、家が流された人もいます。ぼくたちはスクールバスで楽しく学校に行っていますが、悲しい思いをしている人もいます。その思いをもとにもどせませんが、女川の人たちはみんな復興をねがっています。ぼくもいっしょにがんばります」。

松組の子どもたちは届いた手紙をすべて読み、お礼の手紙を書いた。クラスの集合写真の下に「地震の時は怖かったけど、女川町はもっと大変だったと思います」「女川町はきっと復興できると信じています。女川がんばれ」とメッセージを添えた。

松組の担任の長嶋亨先生(60)は「津波被害のことはみんなニュースを見て知っていたが、被災地の子を受け入れたり、女川町の子の手紙を読んだりして初めて、現実のこととして受け止められた。いい機会だった」と話す。

東京と女川の子どもたちをつないだ2人は9月いっぱい短期留学を終えた。松組の子どもたちは女川に帰る2人に、返事の手紙を託した。

(斉藤純江)

「自白は信頼得たから」

警察庁 取り調べ捜査員調査

殺人や傷害致死などの重大事件で、容疑者の自白を得られたのは官廳調系を築

査本部を設けて臨む重大事件のうち、2010年中に9人のうち6人が「刑を恐れた」と捜査員に答えたという。死刑などの重刑を審

米ナ
猛酔

米中
個人が
ンヤト
飼育小
警察ら
騒ぎが
に55匹
たが、

大型貨物船、7カ月ぶり海へ

釣り

裁判

備えて
県の警

一部を
部可組

拡大し
対象